

## 国際交流員のコラム

### ●奄美大島で大自然と伝統の響きを探る Part. 1●

—鹿児島県国際交流員 鄧麗霞（中国出身）—

あっという間に3月を迎え、1年間の国際交流員の仕事を締めくくる時期を迎えました。鹿児島県庁で仕事をする上で、何度も鹿児島には2つの世界自然遺産を有する日本で唯一の都道府県であることを耳にしました。帰国する前に、ぜひその世界自然遺産の魅力を自分の目で確かめたいと思っていたところ、3月に鹿児島県の離島へ取材に行くチャンスに恵まれました。それで、2021年に世界自然遺産に登録された「奄美大島・徳之島、沖縄島北部及び西表島」のうちの1つである奄美大島を訪れました。

今回の取材には、鹿児島国際大学経済学部の康上先生のタイミングが合い、同行していただきました。飛行機は約50分間海上を飛び、奄美大島空港に着陸する直前、エメラルド色の海が目飛び込んできました。

私と康上先生は二人とも初めての奄美大島訪問で、わくわくしながら奄美パーク行きのバスに乗り込みました。奄美大島は非常に温暖な気候で、乗客の中には3月なのにも関わらず半袖の人もいらっしゃいました。私たちが「奄美パーク」で降りるべきか「奄美パーク入口」で降りるべきか悩んでいたところ、乗車していた男性（この方は既に半袖でした☺）が親切に、奄美パークで降りた方が近いと教えてくれました。



「奄美パーク」の入口



パイナップルのようなアダン

奄美パークでは、奄美の亜熱帯植物を鑑賞できるほか、「奄美の郷」や「田中一村記念美術館」などの施設もあります。「奄美の郷」では、奄美の美しい自然や多様な文化、歴史、民俗が紹介されています。私は、奄美の伝統的な年中行事が紹介されたテーマウォールに興味を持ち長い間立っていました。奄美の伝統行事は多くが旧暦で行われ、その中でも特に盛大に行われるのは、旧暦8月15日の「十五夜豊年祭」だということを知りました。十五夜豊年祭は、一年間の農作物の収穫を祝うとともに、集落の無病息災に感謝する行事です。この日に中国では

「中秋節」として満月を楽しみながら、秋の豊作と家族の幸福を祝う「十五夜豊年祭」とよく似た伝統的な行事が行われます。「十五夜豊年祭」以外にも、

約 40 枚の行事の写真が展示されており、島民たちが自然と共生し、真面目に生活している様子が伝わってきました。

また、奄美パークの一角には、田中一村記念美術館があります。田中一村は、奄美で彼を知らない人はほとんどいないほど非常に有名な画家です。彼は奄美の自然を愛し、亜熱帯の植物や花鳥を鋭い観察眼と優れた画力で描き、作品の中に独特の世界を作り上げていました。美術館では、田中一村の作品に加えて、他にも「奄美へ」という奄美に関する要素を取り上げた企画展も楽しむことができました。

奄美パークのお土産として、田中一村の作品が使われたポストカードを購入しました。当日、パーク内のホールでは奄美パーク春祭り「サンガツサンチ」のための演奏会が開催され、そこで島唄を聴くこともできました。



高倉をイメージしたパーク内の建物



大島紬資料館

奄美パークでの視察が終わり、土浜バス停の近くにある「大島紬資料館」と「大島紬美術館」に見学に行きました。スタッフが実物と織機の操作を交えながら、大島紬の複雑な製造工程を分かりやすく紹介してくれました。大島紬を作るには、30 以上の非常に細かい工程が必要であり、一反の織物が完成するために、数十人の職人が半年から一年間という長い時間をかけて、織り上げています。その手間かかる作業に驚嘆していた時、大島紬美術館を運営している社長が案内に来てくれました。

大島紬美術館は広大な海に面しており、リゾートホテルも併設されています。1 階のホールで青い海を眺めると、旅の疲れが一掃されるほど心地よかったです。2 階の美術館では、田中一村の名作をもとに織られた大島紬などが芸術品として展示されています。ここでは、本場の大島紬に触れることができ、織物を使った着付け体験もさせてもらいました。本場の大島紬は軽くて動きやすく、また通気性と保温性に優れている上に、シワにもなりにくく、長持ちするそうです。

その高価な値段には理由があることを知ることができました。



田中一村の絵が使われた大島紬

1日目の取材が終わり、奄美市内へ移動しました。夕食をどうしようか悩んでいたところ、「喜多八」という島料理のお店に入ることができました。地元の野菜や海鮮、鶏肉、豚肉、そして黒砂糖のデザートまで、大満足の食事を楽しめました。店を出る前に、着物の折り紙に包まれた爪楊枝と名刺をいただきました。こんなに可愛い爪楊枝を使ってしまうのはもったいなくて、お土産にしました。



着物の折り紙に包まれた爪楊枝

2日目は、奄美黒糖焼酎「竜宮」を製造している富田酒造を見学しました。四代目の社長が、75周年を迎える会社の歴史や黒糖焼酎の製造工程について説明してくれました。黒糖へのこだわりや、大きなタンクの代わりに1つ1つ甕を使って土着の菌を活用し、米麹を発酵させるという製法が特徴だと聞きました。そのため、甕によって焼酎の味や香りが少し異なることもあるそうです。焼酎に関する知識をまた1つ身につけることができました。



甕で発酵する黒糖焼酎

黒糖焼酎の醸造見学が終わると、大島支庁の職員が迎えに来てくれて、「奄美世界遺産センター」と「黒潮の森マングローブパーク」に向かいました。センターには、奄美大島の森の空間を再現した展示室があり、奄美の象徴ともいえる「アマミノクロウサギ」がどのように独自の進化を遂げてきたのか、その過程を動画で分かりやすく示してくれました。



先頭に立った私たちのカヌー

展示室の見学が終わると、黒潮の海でカヌー体験をすることになりました。泳げない私は最初少し不安でしたが、実際は非常に楽しかったです☺

最初はまだカヌーの漕ぎ方に慣れていない人が多く、うまく方向をコントロールできず、お互いにぶつかったりしており、私たちもなかなか前に進めませんでした。しかし、私と一緒に乗った康上先生と同時に同じ側の水を漕いだことで、カヌーがスイスイと進み、列の先頭に立

つことができました。やはり、力を合わせて1つになって漕ぐことが大切だと実感しました。

途中水路が多岐にわたり、一部の水路は太平洋側に繋がっています。世界一周の旅行にならないようガイドさんの指示に従い、行動することが大切です😊

一方、湾内は静かで底が見えるほど清らかな水域であり、自然との一体感を感じながら、風や波の音を感じることができ、とても心地よかったです。30分後、ゴールに着いてガイドさんに記念写真を撮ってもらいました。

復路は干潮の時間で、水域が往路よりも狭くなり陸地が増えたことで黒い泥から蟹が出て来るところを見ることができました。私たちは兩岸の鷺を見たり、水中の魚を見たりしながら出発点に戻りました。このカヌー体験は美しい自然に囲まれながら、リラックスできる素晴らしい体験になりました。



ゴールに着いて一休憩

次号 (197 号) へ続く・・・